

A・MUSEUM

vol.42
〔2005 3 25〕

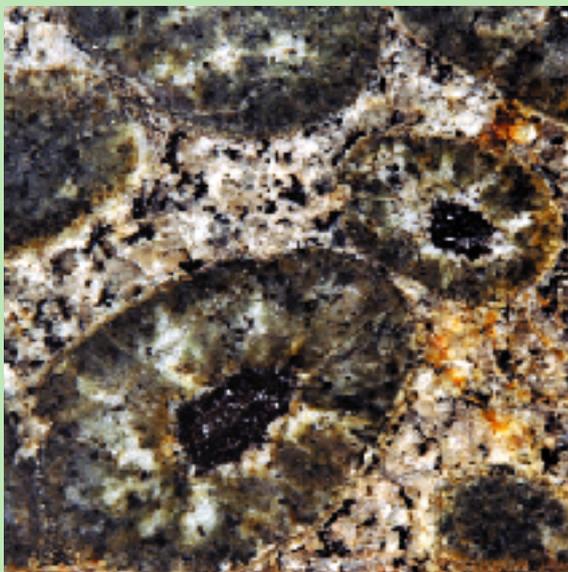


ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



八郷町吉生・峰寺山の球状花崗岩



球状花崗岩の内部のつくり

八郷町の球状花崗岩

球状花崗岩^{かこうがん}は、花崗岩の中に直径5cmほどの球が多数含まれている奇妙な岩石です。この岩石がみられる峰寺山は、筑波山の北東にあり、中腹にある高さ8mほどの崖^{がけ}では、球状部が風化によって丸くくぼんでいます。地元で「小判石^{こはんいし}」とよばれるこの球状花崗岩は、茨城県の天然記念物^{てんぜんきねんぶつ}に指定されています。

筑波山周辺には、地下に入り込んできたマグマが新生代の初め(約600万年前)にゆっくり冷えてできた花崗岩類が分布しています。峰寺山の球状花崗岩は、このマグマの中に砂岩のかけらを取り込まれ、熱で融けてできた溶液^{ようえき}が、マグマとほとんど混合せずに球となり、やがて固まってできた構造です。

当館で展示している球状花崗岩は、切断面で球の外殻^{がいかく}から中心に向かって堇青石^{きんせいせき}が結晶^{けっしょう}したようすを見ることができます。

(資料課：小池 渉)

第33回
企画展

YAKUSO

- 野山は自然のくすりばこ -

Medicinal Plants : A Boxful Gifts of Mother Nature

人は、古くから身近にある植物をいろいろな方法で薬として利用してきました。植物を薬草として利用することは、日常生活の中でごく自然に行われ、健康な暮らしが継承されてきました。

野山にでかけ、薬草を採集することが毎年の風物詩となっていました。そこで採れた薬草は、天日で乾燥した後細かく刻んで煎じて飲んだり、入浴剤としてお風呂に入れたりしながら、身近な暮らしの中に使われていたのです。



雑木林に咲くセンブリ
ドクダミ、ゲンノショウコと並んで、身近な薬草として古くから日本人に親しまれている代表的な植物。お湯で干回振り出しても（煎じても）苦みが残ることから干振（せんぶり）の名が付いた。「これ当に薬である」ことから当薬（とうやく）ともよばれる。昔は野山によく生育していたが、森林の除草刈りなどがなされなくなり、急激に減少した。

ところで、人類はどのようにして自然界から薬を発見してきたのでしょうか。それは病人本人が自らの体験を通して、長い歴史の中で試行錯誤により、薬効のあるものを次々と見つけていったと考えられます。このような経験は、おじいさんやおばあさんの知恵として生活の中で語り継がれてきました。その中には、身近に利用されてきたものもあれば、記録に残され、やがてそれが現代の医薬の基礎を築いてきたものもあります。



薬用酒・果実酒（左から、トチバニンジン、ガマズミ、ユズ）

この企画展では、薬草の身近な利用法を紹介するとともに、薬草を乾燥させてつくるいろいろな生薬、それを調合させてできる漢方薬についても取り上げます。さらには、話題のハーブも紹介します。

植物を薬として利用していたのは、決して遠い昔のことではなく、じつは、今でも私たちの暮らしや健康と密接に関わっているのです。

皆様も、ぜひ、薬草の世界をお楽しみください。

（教育課：根本 智）



いろいろな生薬

会 期 2005年3月19日(土)～6月19日(日)
3月19日(土)は午後1時からの公開となります。
開館時間 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休 館 日 毎週月曜日
(ただし、5月2日は開館し、振替休館日はありません。)

自然講座 「動物とくすり - パンダが病気になったとき - 」

講師：ミュージアムパーク茨城県自然博物館 中川志郎 館長
(元・東京都恩賜上野動物園 園長)

日時：5月8日(日) 午後1時～午後3時
対象：小学生以上 定員：300名(先着順)

自然観察会 「Yakusoの世界 - 薬草栽培の今 - 」

日時：6月12日(日) 午前10時～正午
場所：独立行政法人医薬基盤研究所
薬用植物資源研究センター(つくば市・現地集合)
対象：高校生以上 定員：30名(抽選)

自然講座は、事前に電話または博物館ホームページでお申し込みください。定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。
自然観察会は、5月22日(日)までに電話または博物館ホームページでお申し込みください。応募多数の場合は、抽選とさせていただきます。
1件あたりのお申し込みの人数は、6人までとさせていただきます。

研究ノート◎「田んぼのエビ」見つけた! - 茨城県の大型鰓脚類の生息調査 -

調査の主体者は小学生!

2001年に県西地域の小学生がアメリカカブトエビを相次いで発見したのをきっかけに、小学校や博物館の来館者などの協力を得て、本格的に県内の大型鰓脚類の調査を始めました。これまでに市民、特に小学生の皆さんからたくさんの標本や情報をお寄せいただいています。

第1回目の調査は2002年に県西地域を中心に行われ、その結果はA・MUSEUM vol.135で報告しています。ここでは、2004年の春、公益信託「エコーいばらき」環境保全基金を得て実施された県南地域を中心とした調査の結果を主に紹介します。

県西地域は「田んぼのエビ」が豊富!

これまでの調査で、県西地域には、多くの鰓脚類が生息していることが分かりました。特に、ハウネンエビは、県西地域の広い範囲から報告され、生息が確認された場所は、2回の調査で60カ所以上にのぼっています。また、今回の調査でアメリカカブトエビとタマカイエビが、新たに下妻市で確認されました。

県南地域では?

それでは、県南地域はといったどのような状況なのでしょう。第1回目の調査では、ハウネンエビが八

県西・県南地域の大型鰓脚類市町村別の生息状況

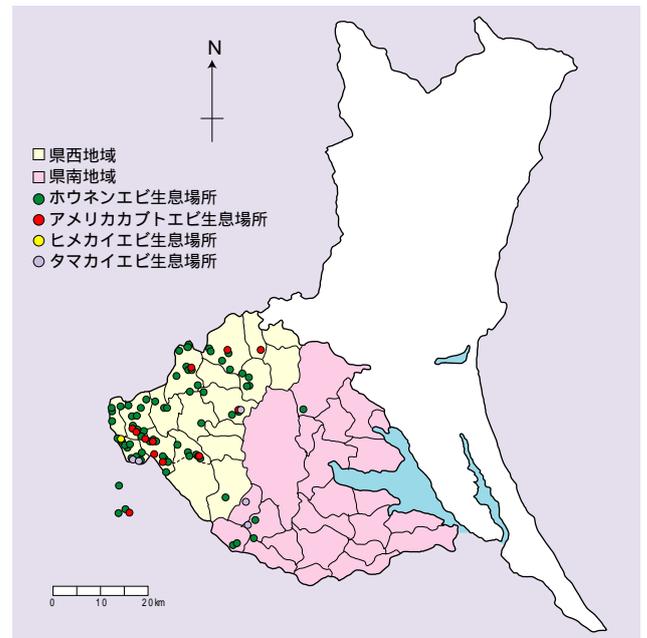
種類	生息地域(市町村)	
	県西地域	県南地域
ハウネンエビ	古河市, 下館市, 結城市, 下妻市, 水海道市, 岩井市, 明野町, 八千代町, 総和町, 五霞町, 三和町, 猿島町, 境町	取手市, 守谷市, 伊奈町, 八郷町
アメリカカブトエビ	下館市, 結城市, 協和町, 総和町, 猿島町, 境町, 下妻市	
タマカイエビ	下妻市, 五霞町	伊奈町, 谷和原村
ヒメカイエビ	総和町, 五霞町	

1 2004年の調査で新たに生息が確認された市町村は下線にしている。
2 岩井市と猿島町は合併し「坂東市」に、下館市・明野町・協和町は合併し「筑西市」になる予定だが、ここでは調査当時の市町村名を使用している。

郷町で確認されただけでした。今回の調査では、取手市、守谷市、伊奈町で新たにハウネンエビの生息が確認されたほか、これまで県南地域での記録のなかったタマカイエビも、伊奈町と谷和原村の2カ所で見つかります。県南地域では、全域に渡る調査を実施してきましたが、生息が確認された地域はわずかで、いずれも県西地域寄りになっています。これまでの結果から、県西地域から、これらの大型鰓脚類の分布が拡大している可能性もありますが、はっきりしたことは、県内全域と近隣の調査を待たなければならないようです。

「田んぼのエビ」が最も観察されるのは、5月～6月にかけて。もし、今年見つけた方はぜひ博物館までご連絡下さい。最後に、今回の生息調査にご協力いただいた方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

(資料課: 池澤広美)



市民からの収集データに基づく県西・県南地域の大型鰓脚類の生息分布図

自然災害に備える 資料を守る

昨年から年明けにかけては、地球規模で起きている大きな天災を含め例年になく災害が多発しました。わが国でも新潟中越地震災害は、多くの災害を及ぼし、昨年11月に新潟で開催予定の全国博物館大会は中止に追い込まれました。災害による中止は日本博物館協会が始まって以来のことです。これを契機に、博物館でも災害のときに、いかに利用者の安全を確保し、博物館の「命」とも言える「資料」を被害から守るかが、あ

らためて問われることとなりました。調べてみますと、絵画・彫刻・古文書などいわゆる文化財には、その対応について世界的にも対応策が整っているのですが、自然系博物館の標本資料類については、災害時の対応について、特段の共通したルールや手順が定まっていないことが分かってきました。

日本の自然系博物館の館長が集まっている館長会議でもこのことが話題になり、各館の状況を持ち寄り、災

害時に大事な資料をいかに保護保全するかを早急に検討することになりました。特に、自然系博物館では、動植物の種類を決定した最初の標本(タイプ標本)が特別な価値を有するため、この保管や災害発生時の保全措置について検討することになっています。

当館には、災害時の対応規定があり、年1回の訓練もしていますが、新たな視点での見直しが必要です。

(館長: 中川志郎)

ダンゴムシ・ワラジムシの研究をしています - 共同研究の成果より -

ダンゴムシやワラジムシって？

ダンゴムシやワラジムシは、昆虫でもクモでもヤスデやムカデのなかまでもありません。じつは、甲殻類こうかくるいといってエビやカニと同じなかまです。エビやカニにはハサミや歩くのには使わない脚あしも含めて8対の脚ついでがあります。ダンゴムシやワラジムシもあご脚1対あごを含めて8対の脚をもちます。また、エビやカニには触角が2対ありますが、ダンゴムシやワラジムシでは触角は1対しかないように見えます。しかし、虫めがねで触角（第2触角）の根元を見るとかなり小さな触角（第1触角）があるのがわかります。つまり、触角の数もエビやカニと同じ2対あることがわかります。両者は、見かけはだいぶ違いますが、このように特徴が一致します。

ダンゴムシやワラジムシは、世界では4,000種が知られており、日本からは2003年現在、約140種が記録されています。



ニホンヒメフナムシ（左）とトウキョウコシビロダンゴムシ（右）

ダンゴムシ・ワラジムシ調査

最近、ダンゴムシやワラジムシに関する情報がテレビ映像や学習雑誌、図鑑などで紹介されるようになってきました。しかし、茨城県内においてダンゴムシ・ワラジムシの総合的な生息状況は調査されていませんでした。私は、2003年に国立科学博物館との共同研究において、茨城県内におけるダンゴムシ・ワラジムシ

類の分布調査を行いました。この調査において、県内150地点からワラジムシ・ダンゴムシを採集し、19種類のダンゴムシ・ワラジムシを見つけることができました。また、この共同研究の中で、教育普及のための資料として、ダンゴムシ・ワラジムシのガイドブックと検索用の下敷きを作成しました。この下敷きを使うと、採集したダンゴムシやワラジムシの名前を自分でさがすことができるようになっていました。さらに、ガイドブックには県内で見つかった19種のダンゴムシ・ワラジムシの詳しい解説をのせました。このガイドブックや下敷きを使ってダンゴムシやワラジムシを身近に感じていただければ幸いです。（資料課：湯本勝洋）

見つけたダンゴムシ・ワラジムシ 19種

海岸や海岸林で見られるもの	公園や家の近くで見られるもの	林縁や荒地で見られるもの	自然林で見られるもの
フナムシ	ホソワラジムシ	ヤマトサトワラジムシ	ニホンヒメフナムシ
ニホンタマワラジムシ	ワラジムシ	マサヒサトワラジムシ	ゼグロコシビロダンゴムシ
ニホンハマワラジムシ	オビワラジムシ	カントウハヤシワラジムシ	トウキョウコシビロダンゴムシ
ニッポンヒロワラジムシ	ヘリジロワラジムシ	ナガワラジムシ	
ハマダンゴムシ	オカダンゴムシ	タジマコシビロダンゴムシ	

アリの巣などで見られるもの

オカメワラジムシ



ダンゴムシ・ワラジムシガイドブックと検索用下敷き

自然災害に備える TSUNAMI I

スマトラ沖地震による津波被害の様子が連日報道されました。

津波は主に地震による海底の振動が海水に伝わり、そこから波が四方に伝わって起きる現象です。ちなみに、tsunamiは国際的に共通のことばです。

この報道を見ていると、青森県むつ市に住んでいた小学生の頃の体験を思い出します。海岸近くで遊んでいると、遠浅の海がどんどん引いていくのに気づきました。いつもは見えない海底が現れ、逃げ遅れた魚が

暴れていました。子どもたちはそれを捕ろうと、われ先に走っていききました。すると後ろの方で、「津波が来るから戻れ！」と大人たちの叫び声が聞こえ、火の見櫓の半鐘が鳴り出しました。何がなんだか分からないまま戻ると、沖の方から海水が押し寄せて来るのが見えました。波の高さは数十cm、引きはじめてから10分くらいでした。波はいつもの岸より少し高い所まで押し寄せましたが、幸い私の周囲では、被害はありませんでした。

昔から『潮が異常な引き方をしたら急いで山へ逃げろ。』という言い伝えがあり、今回の報道からもそのことをあらためて知ることができました。

その時の津波は、1952年3月4日に起きた十勝沖地震によるもので、波の高さは北海道南部の厚岸町で最高6.5m、三陸沿岸で1~2m、死者・行方不明者33名との記録があります。

（学芸嘱託員：小林 俊）

ツキノワグマはなぜ人里に出没したのか？

2004年秋、ツキノワグマの人里への出没が連日のように報道されました。特に北陸、近畿、中国地方などで普段はクマがいない場所への出没が目立ちましたが、本州全体で100名あまりの方が負傷し、2名が亡くなりました。クマ側への影響も大きく、有害捕獲で約1,700頭ものクマが捕らえられました。

原因の特定はこれからの課題ですが、もちろん簡単な作業ではありません。出没について、全国的な規模での情報収集とその解析のためのシステムが未整備だった上、クマの個体数の増減や、分布域の拡張についての正確な情報さえ存在しなかったためです。従って、今回の出没理由についてはまだ推測の域を出ませんが、原因は複合的なものと考えています。

そのひとつとして、クマの生活場所でのエサ不足があげられています。本州のクマ生息場所の多くは、本来の広葉樹林から、スギやヒノキなどの人工林に転換されています。さらに近年は病気によるナラ類の枯損が起こっている上、いくつもの台風が通過してドングリ類を地上に落としたことがその説明理由です。

しかし今回の出没は、長期的に見れば、本来クマの生息場所と人里を分ける中山間地帯が緩衝地帯の役割を失い、また人の怖さを知らない新世代グマが出現したことが背景にありそうです。

日本の国土は狭い上に多くの人口を抱えるため、もともと人とクマの生活空間は非常に接近し、ある場合は重複しています。この重複空間（中山間地帯）で、人間はある時はクマを捕り、また薪炭林や焼き畑などとして積極的に利用整備することにより、クマの侵入を遠ざけてきました。このことが、中山間地帯に山と里を隔てる緩衝地帯としての役割を与えていたのです。

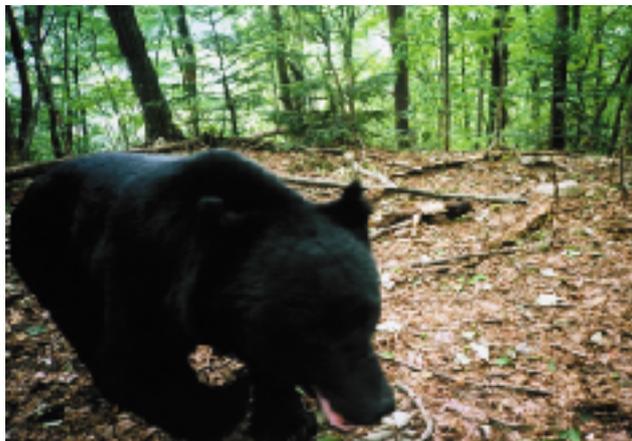
しかし近年、山村の過疎・高齢化が急速に進んでおり、山の手入れは忘れられ、クマの食物量が相対的に増加

してきました。また、人家周辺に植栽された果樹も利用されなくなり、美味しくて簡単に手に入る食べ物が見つかる場所としてクマたちを魅了する場所になっています。

1990年代にはいると、多くの地域でクマ猟の捕獲自粛や、盛んに行われていたクマの有害捕獲も世論に押される形で減少傾向に入りました。新しいクマの保護管理の第一歩として評価すべき大きな転換でしたが、単に「捕らない」という画一的な対応では、クマの科学的な管理に直結するとは言い難い面もあります。山村の活力低下と、こうしたクマへの対応策の転換が、人の怖さを知らずに、人家周辺に日中でも姿を表す新世代グマの誕生を後押しした可能性があるからです。

この仮説が当たっていれば、今年に限らず今後も同様の出没が繰り返されることとなります。クマが出没した時の緊急対応システムを構築する一方で、クマの出没をまず防ぐための管理案の策定が望まれます。そのためには、今回起こったクマ出没事例についての丁寧な情報収集と、その状況の解析が求められそうです。

(教育課：山崎晃司)



自動撮影されたツキノワグマ

自然災害に備える 当館の防災計画

当館では、「ミュージアムパーク茨城県自然博物館消防計画」を定めています。計画は、当館における防火管理業務についての必要な事項を定め、火災、震災その他の災害への対策及び人命の安全並びに災害の防止を図ることを目的としています。

(1) 予防管理対策

火災を予防するため、防火及び火元担当者を指定し、自主点検、検査を実施しています。

(2) 自衛消防活動対策

災害時において入館者の安全確保と被害防止を図るため、通報連絡班 避難誘導班 消火班 搬出班 救護班などの自衛消防組織について具体的に役割を定めています。

(3) 震災対策

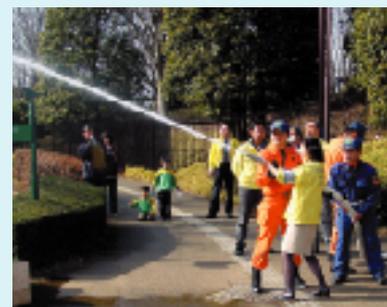
地震時においては、被害を最小限にとどめるため、建物の点検等を行うとともに、地震時にどのように対応すればよいかを定めています。

(4) 防災教育及び訓練

消防署の指導の下、消火、通報及

び避難誘導訓練を毎年実施しています。

(管理課：宮澤 弘)



防災訓練のようす

姉妹館から記念品をいただきました

当館の開館10周年を記念して、海外の姉妹館である中国・内蒙古自治区博物館とアメリカ・ロサンゼルス郡立自然史博物館から、それぞれ記念品が贈られました。記念品はそれぞれの博物館を象徴するすばらしいプレゼントでした。ここではその記念品を紹介します。

内蒙古自治区博物館からのプレゼント

当館と内蒙古自治区博物館は、昨年に開館10周年記念企画展「恐竜たちの足音が聞こえる」を共同開催し、ゴビ砂漠から産出した多くの恐竜類化石を展示公開しました。これを契機として、プロトケラトプスの全身骨格複製標本が、内蒙古自治区博物館から贈られました。

プロトケラトプスは、内蒙古自治区で産出する代表的な植物食恐竜です。白亜紀後期の原始的な角竜類で、頭部にある大きな穴があいたフリル（えり飾り）が特徴です。この標本はゴビ砂漠で発見された化石をもとに複製されたもので、体長は2.2mです。

当館では、この標本を大切に保管し、今後、展示などに活用していく予定です。（資料課：小池 渉）



プロトケラトプスの全身骨格標本（複製）

ロサンゼルス郡立自然史博物館からのプレゼント

ロサンゼルス郡立自然史博物館は、教育活動にたいへん熱心な博物館です。中でも、大型トレーラーを改造した3台の移動博物館や、貸出用の学習キットなどのアウトリーチ活動は全米一とっていいのではないのでしょうか。今回贈られた記念品は、アメリカ先住民の文化と暮らしを学ぶ学習キットです。その構成は、実物で再現した先住民たちの道具類、関連書籍、ポスター、指導者用のマニュアルなどです。子どもたちが実物に触れて、体験しながら学べるところがすばらしいところです。当館では、このキットに日本語の解説を加えて、活用していきたいと考えています。

（教育課：滝本秀夫）



アメリカ先住民の文化と暮らしを学ぶ学習キット
(Acorns, Sea and Sage)

春植物の大群落 - ニリンソウ -

ニリンソウは、山野の湿ったところなどに生えるキンポウゲ科の多年草です。早春に大きな群落をつくって、白い花を一面に咲かせるようすはとても見事です。ニリンソウの名前は、1本の茎に2つの花を付けることに由来し、演歌の曲名になったことでも有名です。しかし、花は1つの場合や3つ付けることもあります。

ニリンソウは、北海道や東北では早春の山菜として利用されています。一方、この時期に猛毒のトリカブトを食べて中毒を起こしたという痛ましいニュースも耳にすることがあります。それは、トリカブトの芽生えとニリンソウが、とてもよく似ているからなのです。両者は、生長すれば違いがよく分かりますが、春先の芽が出たころはその見分けが難しいのです。しかも同じところに生えることがあるため、いっしょに採取してしまい、中毒事故が後を絶ちません。このことは、開催中のYakuso展でも紹介しています。

ニリンソウは、カタクリと同じように、春先にしか見ることができない春植物のひとつです。山菜として...などとは考えずに、その群落の美しさを、ぜひとも目で楽しんでください。（資料課：太田俊彦）



ニリンソウの大群落

（撮影：滑川敏行）

トピックス

進化基本計画の概要 その1

いま全国の博物館が「博物館はどのようにあるべきか」という命題に取り組み、様々な活動に力を注いでいます。美術館や博物館でコンサートが開かれたり、おしゃれなレストランができたりと単に展示を観るだけの場所ではなくなってきています。

当館は、開館当初から「茨城の風土に根ざした、自然に関する、総合的な社会教育機関」を基本にして運営してまいりました。博物館本来の業務である資料の収集・保管、展示、調査・研究活動とともに、学校や他の社会教育施設との連携を図る教育普及事業、レクリエーション、地域活動、国際交流などの文化的事業を行ってきました。そして、何よりも皆様が公園にでも出かける感覚で気軽に来られるように楽しい博物館づくりを目指してきました。

そして、開館10周年を機にこれまでの博物館活動を冷静に見直し、先の命題に取り組みました。「博物館って何だろう?」「資料の収集や調査・研究は何のために行うのか?」などをあらためて考え、現状の把握と課題の整理を行いました。さらに、情報化、少子高齢化、自然環境の変化などの様々な社会情勢について分析を行い、博物館活動の指針を進化基本計画としてまとめました。今号からその概要を紹介しします。

計画は、当館の目指すべき方向を基本理念、使命及び目標で明らかにし、基本計画と実施計画で今後10年の具体的な活動を定めました。人と自然の関係をともに生きる「共生」と捉え、そのために市民の皆さんと一緒に活動していくこと、すなわち「協働」が重要と位置付けしました。これから当館は、「自然と共生し市民と協働する博物館」を目標として博物館活動を行ってまいります。(企画課:森田 修)

新キャッチコピー決定

「過去へのとびら 未来へのとびら

みんなでひろく ミュージアムパーク」

皆様、博物館ニュース表紙の枠下に掲載しているキャッチコピーが、今号から新しくなったことにお気づきでしょうか。

これは、開館10周年記念事業の一環として実施した第2回キャッチコピー大賞において、応募総数676点もの作品の中から栄えある大賞に選ばれた北相馬郡利根町にお住まいの宮崎隆治さんの作品です。

この作品は、当館の基本理念である「過去に学び、現在を識り、未来を測る」という意味と、当館が今後10年を見据えて策定している「進化基本計画」(左記事参照)で、当館が目標の1つとして掲げている「市民との協働」という意味の2つ内容が、おぼえやすいフレーズの中によく表現されているという理由から選ばれました。

これから、当館のパンフレットや博物館ニュースなどでお目にとまる機会が増えることと思います。

このキャッチコピーに負けないように、充実した博物館にしていきますので、これからも応援よろしく願います。(企画課:村山 哲)



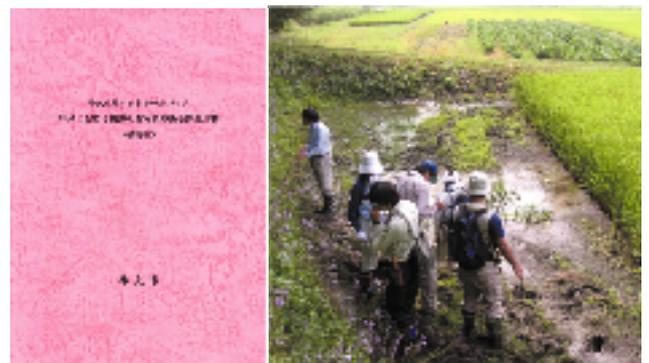
押野副館長(右)からキャッチコピー大賞の表彰を受ける宮崎隆治さん(左)

牛久市版レッドデータブック(植物編)が完成

絶滅のおそれのある動植物をリストアップした本のことをレッドデータブックといいますが、このたび、牛久市でレッドデータブック(植物編)が刊行されました。この刊行にあたって、当館の職員をはじめ東京大学や筑波大学の研究者、地元のボランティア、市の職員の総力が結集されました。調査は、2003~2004年の2カ年にわたり、43人が延べ37日間178カ所を踏査しました。そして、市内で生育が確認された84種類の植物のうち、176種が絶滅危惧種に指定されました。

県単位では多く刊行されているレッドデータブックですが、市で刊行されるのは茨城県では初めてであり、全国でもあまり例を見ません。この本が、地域に残さ

れた貴重な自然を守るために広く活用されることを期待します。(企画課:小幡和男)



完成したレッドデータブック(左)と調査風景(右)

「自然博物館子ども教室」を開催しています



当館では、1月から3月の期間、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」を受けて小学生向けの「自然博物館子ども教室」を開催しています。土曜日を中心に延べ20講座以上開催し、参加した子どもたちの合計は、200名程になりました。動物や植物や化石などに関わる自然博物館らしいテーマのもとに、工夫をこらした内容で小学校1年生から6年生まで、みんなが楽しめる体験活動を実施してきました。

では、いくつかの活動を紹介します。上の写真は、「砂絵で野鳥を描こう」というテーマでの活動風景です。指導員が双眼鏡の使い方や野鳥の特徴を説明しながら、当館に隣接する菅生沼でコハクチョウやジョウビタキなどを観察した後、砂絵で野鳥を描きました。小学1年

生でも楽しめるように工夫された自作の砂絵教材を使って、きれいな砂絵を完成させることができました。

その他にも、冬ならではの植物の観察、実物を使った生きものや化石の観察、おもしろ工作、ネイチャーゲームなど毎回工夫をした内容で実施してきました。

この事業は、本年4月以降も開催します。小学生の皆様、ぜひ博物館に来て「自然博物館子ども教室」に参加してください。（教育課：中島政明）

編集後記

茨城県西部としては珍しく、3月上旬になってから、道路に積もるほどの雪が降りました。

菅生沼や、博物館の野外施設が雪化粧したようすは、とてもきれいでした。博物館は、あまり雪の降らない場所にありますので、たまにしか見るできないのが残念です。（TM）

【交通案内】



常磐自動車道谷和原 ICから20分。
JR柏駅で東武野田線乗り換え、
東武野田線愛宕駅～茨城急行バス
「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、
徒歩10分。



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

ご利用案内

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ
	企画展開催時	通常時	
大人	720円(580円)	520円(420円)	200円(100円)
高校・大学生	440円(300円)	320円(200円)	100円(50円)
小・中学生	140円(70円)	100円(50円)	50円(30円)

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・昭和13年4月1日以前に生まれた方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

つぎの日の入館料は無料です。

4月29日(みどりの日) 6月5日(環境の日)
11月13日(茨城県民の日) 春分の日
高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(但し、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

毎週月曜日(但し、5月2日(月)は開館し、振替休館日はありません。)
館内整理のための臨時休館
2005年6月27日(月)～2005年7月1日(金)